

研究会報告



第3回東京医科大学脈管研究会

日 時：平成9年3月11日(火)

午後6:00から

会 場：東京医科大学病院

教育棟5階 講堂

当番教室：解剖学第一講堂

世話人：内野滋雄

1. 門脈の希な側副循環路と左胃静脈の

変異とが同時に現れた1例

(解剖学第1)

大久保真人, 松山永久, 飯村 彰,  
中村陽市, 市川早苗, 内野滋雄

我々は肝硬変の際の門脈圧亢進に伴う希な側副路と、左胃静脈の異常分布を同時に発現した症例に遭遇した。この症例は65歳にて肝硬変で死亡した女性( )で、病歴は不明である。門脈の側副路は左腎静脈と左胃静脈の間に見られた発達した交通枝で、体の左側で腎静脈-副腎静脈-横隔静脈-食道静脈-左胃静脈の交通が著しく顕在化したものと考えられる。左胃静脈は門脈には合流しないで、肝門付近で2枝に分かれて直接肝臓に進入していた。そのうち1枝は肝臓内で門脈左枝に吻合し、他の1枝は肝臓の方形葉に分布していた。右胃静脈は認められなかった。この左胃静脈の形態は発生学的には左門脈の残存(三木, 1973)と考えられ、Miyaki et al(1987)に次いで、日本人では第3例目の報告である。なお、臍静脈の開存と腹腔動脈の非形成も見られた。

2. 性周期におけるマウス子宮内膜毛細血管の形態変化  
(解剖学第2)

清水 澄, 佐藤 亨, 山田仁三

生殖過程で重要な位置を占める子宮内膜に存在する毛細血管の性周期における形態変化について、電顕を用いて検討した。

正確に4日の性周期を示した10週齢のIVCS系マウスを用いた。性周期の各時点の子宮を、1/2Karnovsky液で、固定、オスミウムで再固定、エポソ包埋、切片をウラン、鉛二重染色後、被覆上皮下の毛細血管を観察した。

その結果、内皮細胞の窓は、発情前期に出現し、発情期に消失、非発情期には観察されなかった。血管腔は、非発情期-2で著しく細くなった。

マウスでは、子宮内膜上部にはリンパ管が存在しないことから、観察した脈管は毛細血管である。観察した結果より、周期的に毛細血管の形態を変化させることにより、血管透過性を変動させ、子宮内膜の環境を調節していると考えられた。

3. 臨床的にTTPと診断され、主として小動脈に

フィブリノイド血管炎が認められたPNの1例検例

(病理学第1) 西川純子, 鈴木晟幹, 高橋俊二, 五百部浩昭,  
綿鍋維男, 嶋田裕之

(老年病学)

佐藤慶仁, 深谷修一, 黄川田雅之, 馬原 孝彦, 高崎 優

臨床的にTTPと診断されたが、剖検上、主として小動脈にフィブリノイド血管炎が認められたPNにつき報告する。

【症例】死亡時80才、女性。1993年7月より発熱持続。抗生剤投与されたが下熱せず、貧血、血小板減少進行。精神神経症状出現してきたためTTPと診断。ステロイド投与等の治療を行ったが同年10月死亡。【検査所見】白血球増多、貧血、著明な血小板減少、LDH、BUN、CRPの上昇。FDPの著明な増加。

【病理学的所見】腎、腸管、胆嚢、肝、脾、膵等の主として小動脈に、内、中膜のフィブリノイド変性、弾性板の断裂を伴うフィブリノイド汎動脈炎等、PN各期の病変が広範に観察された。一方、半月体形成性壊死性糸球体腎炎等多彩な糸球体病変が認められ、連続切片による検索では腎直細動脈末梢の毛細血管壁にフィブリノイド変性が観察された。顕微鏡的PNとの異同が問題になったが、汎動脈炎が主として小動脈に見られた点で、本症例ではPNであると考えられた。